父親の子育て支援ニーズに関する調査
－子育てをする父親の心理的居場所づくり－

松　井　香　澄　　瀬々倉　玉　奈
（株式会社ベネッセスタイルケア）　（児童学科）

抄録　父親の育児参加に関心が寄せられており、2021 年には、育児・介護休業法が改正されている。ところが、現在行われている子育て支援の多くは母親を対象としている。そこで、本稿では、数少ない父親を対象としている子育て支援について、実践者に対するインタビュー及び実践の関与観察、さらに 20 名の父親を対象としたアンケート調査を実施した。調査の結果、従来から指摘されている母親の居場所づくりの重要性のみならず、父親の居場所づくりも重要であること、また、新生児期というピンポイントではなく、継続的な育児期間における技術面の実践が子育て支援教室の内容として求められていることが明らかとなった。

キーワード：父親の育児，父親の心理的居場所づくり，育児技術，子育て支援教室 , 子育て支援イベント

１．問題
（1）父親の育児効果

現代社会において、家族の在り方やワークライフバランス、ジェンダーへの認識などの変化に伴い父親の役割や父親の育児の認識についても変化が認められ、父親の育児参加の必要性が強調されるようになってきている。これにより、2021 年 6 月には育児・介護休業法が改正されたり、各自治体で休日開催の父親教室や両親教室が開催されたりするようになってきている。

では、なぜ父親の育児が必要なのだろうか。加藤・越智等（2022）は、2010 年以降に報告されている父親の育児参加に関する文献レビューを行い、母親が父親の積極的育児参加を認知している場合、以下のような 2 つの傾向が認められたとしている。まず、母親の幸福度が高く育児負担感は低い。次に、子どもの成長においても、怪我や肥満の予防など健康・発達に良い影響を及ぼしている可能性が示唆されている。

（2）父親の家庭時間

一方、OECD（経済協力開発機構）の調査によると、2016 年における 6 歳未満の子どもを持つ夫（父親）が 1 日に家事・育児関連に費やす時間は 83 分である。5 年前の 2011 年と比較すると 16 分増加してはいるものの内閣府男女共同参画局発行の「男女共同参画白書令和 2 年版」によれば、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、ノルウェーの 6 箇国と比較すると、日本の男性の家事・育児関連時間は最も低くなっている。

これに関してベネッセ総合教育研究所（2018）が行った父親の帰宅時間の国際比較では、日本は 22 ～ 0 時台の帰宅が最も多く 23.0％を占めている。19 時台で帰宅する割合は僅か 17.6％である。一方、フィンランドは 16 時台の帰宅が 36.4％で最も多く、19 時台の帰宅は 6.2％である。中国は 18 時台の帰宅が 30.7％で最も多く、19 時台は 21.2％、インドネシアは 19 時台の帰宅が最も多く 42.3％で、それ以降の時間は

15％以下となっている。上述した日本以外の3箇国では19時台までの帰宅が多いのに対し、日本の父親は群を抜いて帰宅時間が遅く、家庭で過ごす時間が少ないことは明らかである。その結果として子どもと関わる時間が少なく、父親が平日に育児に関わることが難しいということが理解できる。

（3）父親の育児環境

では、父親が早く帰宅できるようになれば、育児に積極的に参加するのだろうか。柳原（2007）の調査では、父親の育児参加阻害要因に「そう思う」と回答したもので高い割合を示したのは、「時間があればもっと育児参加したい」という項目で72.3％、「育児参加阻害要因の項目に上がっている問題が解決されれば育児に参加したい」という項目が72.4％である。これら2項目に続いて「仕事が忙しく育児への時間が持てない」が65.6％、「育児休暇を取るのは体裁が悪い」が55.2％である。

対して、「そう思わない」と回答した内容で高い割合を示したものが、「育児にあまり関心がない」が82.8％、「育児参加することで周囲からの批判がある」が73.9％、「育児に対する自信がない」が49.2％、「育児は基本的に母親の仕事だと思う」が47.0％である。つまり、日本の父親は，育児に関心がある一方、育児時間の確保以外にも多くの阻害要因があることが理解できる。

実際、男性の育児休業取得率の推移を見ると、2007年当時は父親の育休取得率は1.56％と極めて低いと言わざるを得ない。これらのことから、父親も母親と同様にもっと育児を行いたい、子どもと関わりたいと思っているが、仕事の忙しさや育休取得の難しさから断念せざるを得ない状況であることがわかる。

このような実状を受けて2010年には育児・介護休業法が改正され、新たに「イクメンプロジェクト」が始動している。「イクメン」とは、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性のことを指す。このプロジェクトで厚生労働省は、育児休業取得率を2020年までに13％、2025年までには30％まで引き上げることを目標に掲げており、2020年度の男性の育児休業取得率は12.65％となっている（厚生労働省.2021）。目標とする13％には及ばないものの前回調査（2019年）の7.48％に比して5.17ポイント上昇し、過去最高の取得率を示している。

2021年6月には育児･介護休業法が改正され、2022年4月から段階的に施行されている。改正後の育児・介護休業法では、男性が育児休業とは別に取得できる「出生時育児休業」（「産後パパ育休」）が創設されている。また、現行制度では不可能であった育休の分割取得が2022年10月から「出生時育児休業」も含め分割して2回取得することが可能となっている。それに加え、育休開始日を柔軟に設定でき、夫婦で育休を途中交代することが可能となっている。その他にも、育児休業と出生時育児休業（以下2つをまとめて「育休」とする）の申し出が円滑に行われるようにするため､事業主に対して、雇用環境の整備、個別の周知、意向確認の措置の3つが義務化されている。

さらに、事業主には制度についての研修や相談窓口などの整備も義務化され、男女を問わず労働者が「育休」を取得しやすいように雇用環境の整備が進み、全ての労働者が「育休」を取りやすい環境へと是正されつつある。

（4）自治体で行われている子育て支援教室

上述したような男女を問わず子育てに携われることを推進する一環として、母親教室ではなく両親教室の実施が増加していることに加え、父親教室やプレパパスクールといった父親に向けた育児教室が多くの自治体で実施されている。2021年度に開催されている両親教室及び父親教室の実際を調べたところ、次のような状況が確認できる。政令指定都市の中から宮城県仙台市、神奈川県横浜市、愛知県名古屋市、大阪府堺市、福岡県北九州市の5市のホームページによれば、新型コロナウイルスの影響もあり対面だけでなくオンラインで実施している。育児教室の開催日時については、仙台市の両親教室は金曜18時30分からの開催、他の4市は両親教室、父親教

室ともに土・日曜に開催されている。

講座内容は各自治体によって違いがあるものの、座学の講座では、主に「妊娠中の食事や身体について」「胎児の成長」「お産の進み方」について専門家からの講話が行われている。また、愛知県名古屋市では、「夫婦の協力と子育て」や「働きながらの育児ポイント」といったような夫婦で育児について考える時間を設けている講座もある。実践講座としては「沐浴」「赤ちゃんの抱っこの仕方」「おむつの替え方」が実施されている。上記以外にも宮城県仙台市太白区では先輩パパママの話を聞く機会が設けられていたり、大阪府堺市では赤ちゃんの泣きへの対応方法についての講座があったりと実践の講座も地域によって様々である。

一方、母親教室や妊婦教室についても上述の5市を確認する。母親教室は平日に開催されており、座学講座に関しては、「妊娠中の食事・栄養」、「赤ちゃんを迎える準備」、「歯科衛生」についての講座が主であった。自治体によって講座内容に違いはあったが、両親教室や父親教室で実施されている座学講座と大きな違いは認められない。実践形式の講座も両親教室や父親教室と同様、「沐浴」「抱っこの仕方」など赤ちゃん人形を用いた育児実習の講座が認められる。母親教室の講座として開催はされていないが、平日に離乳食教室や子どものしつけに関する教室等を実施している自治体もある。両親教室や父親教室と母親教室の講座内容に大きな違いはないものの、母親教室でのみ母親同士の交流の場が設けられており、両親教室や父親教室では行われていない。

また、足立（2020）が全国の中核市と特例市を含む771市、東京都と政令市の216区、744町、183村の計1914の市区町村を対象に実施した調査によると、父親（パートナー）の両親教室の受講率は20％にも満たないことが明らかになっている。

2. 研究

(1) 本研究の概要と目的

本稿は、以下の量的及び質的研究から構成されている。まず、父親へのアンケート調査を行い、父親が育児教室に求める講座内容や開催条件などを明らかにする。次に、父親の子育て支援を実践している男性保育士へのインタビューと実践活動の関与観察を行い、未だ数少ない実践例から父親が求める子育て支援環境や活動の内容について知見を得る。これらの研究を通して、父親への子育て支援と母親への子育て支援とではどのような違いがあるのかを明らかにし、父親が子どもや母親と一緒に子育てを楽しむきっかけの1つとなるような活動内容を検討する。

倫理的配慮

調査を実施するにあたって、調査目的や個人情報等の取り扱い、研究目的以外にデータを使用しないことについて明記し、同意を得たうえで実施した。アンケートは無記名としている。

(2) 父親へのアンケート調査の概要

既述したように、父親は育児に関心があり、社会全体としても父親の育児を促す環境へと変化しつつある。一方で、育児を阻害する要因は多々存在しており、育児教室への参加も依然として少ない傾向にある。このような現状を踏まえて、Googleのアンケートフォームを用いた調査を実施した。その際、子育て支援教室は育児に関する「知識」を提供する教室、子育て支援イベントは子どもとの「遊び」を中心とした活動と定義した。

調査期間：2021年9月20日～11月24日の約2か月を要することとなった。地域の子育てサークルや任意団体に依頼しても返答が得られないなど、調査協力者を見つけるのに手間取ったことが理由である。

調査対象：0～5歳の乳幼児期の子どもの育児経験がある父親を調査対象とした。具体的には、筆者らが携わっている京都女子大学親子支援ひろば「ぴっぱらん」の参加者及び地域のコミュニティへの依頼である。

(3) アンケート調査結果

① 回答者の基本情報

アンケートには、20 名の父親からの回答が得られた。回答者の年齢は 30 代後半が最も多く 9 名、次いで 30 代前半が 7 名であり、30 代の父親が回答者の 80％を占めた。子どもの年齢の平均は 5.14 歳 ± 3.34 歳であり、1 家族あたりの子どもの人数は 1.8 人（SD ＝ 0.93）であった。

表 1　父親の年代

年　代	20 代前半	20 代後半	30 代前半	30 代後半	40 代前半	40 代後半
人　数	0	1	7	9	2	1

父親の現在の就労形態については、フルタイムが 90％、テレワークが 15％、自営業が 10％であった（図 1）。

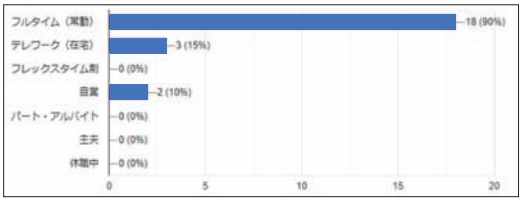

図 1　父親の就労形態

一方、配偶者（パートナー）の就労形態についてはばらつきがあり、フルタイム勤務が 45％、パート・アルバイトが 20％と続き、自営業 15％、テレワーク 10％、専業主婦は 5％であった（図 2）。配偶者が専業主婦や休職中と回答した家庭は 10％以下となっており、共働きで子育てをしていることがわかる。

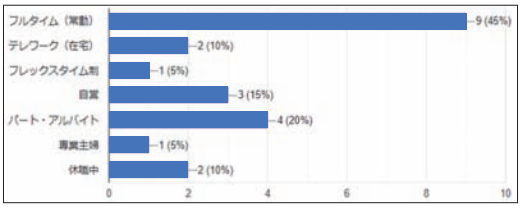

図 2　配偶者（パートナー）の就労状況

② 父親の行っている育児・家事

「父親が行っている育児・家事」について回答を求めた。「よくする」を 5 点、「どちらかと言うとする」を 4 点、「どちらとも言えない」を 3 点、「どちらかと言うとしない」を 2 点、「しない」を 1 点とし、各項目得点の平均を比較した。その結果、「子どもと遊ぶ」「配偶者と子どものことについて話し合う」の 2 項目の点数が最も高く、4.7 点であった。対して、最も点数が低かったのが「保育園・幼稚園への送迎」「病気の子どもの世話」の 2 項目で 3.7 点であった（図 3）。

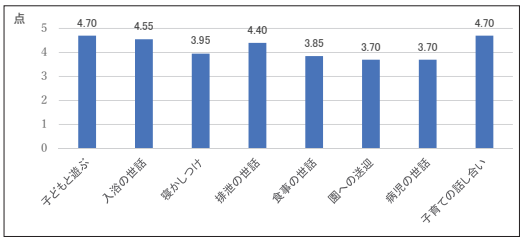

図 3　父親が行っている育児

最も点数が高い「子どもと遊ぶ」「配偶者と子どものことについて話し合う」の 2 項目と、最も点数が低い「保育園・幼稚園への送迎」「病気の子どもの世話」の 2 項目の平均値を比較すると 1.0 点の差が認められた。

また、育児期に父親が行っていた家事についての質問についても「よくする」を 5 点、「しない」を 1 点とし、得点の平均値を比較した（図 4）。各項目に大きな差は見られないが、最も多くの父親が行っていた家事は、「ゴミ出し」で 4.5 点であり、最も点数が低かったのは「食事作り」の項目で 3.0 点である。1.5 点の差が認められた。

点数が高い「ゴミ出し」「食器洗い」は、一日の生活の中でも比較的費やす時間が短い単純作業といえる。出勤時や手が空いた際に手軽に行える家事を父親が行っているようである。

対して、比較的時間やスキルを必要とする「食事作り」や「洗濯」は点数が低く、配偶者または同居人がその家事を担っていることがわかる。

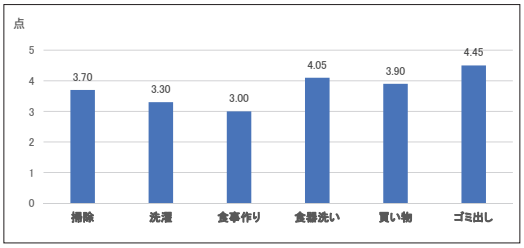

図 4　父親が行っている家事

③ 育児情報の獲得方法と子育て支援活動への参加

図 5 は、育児知識の獲得方法についての回答

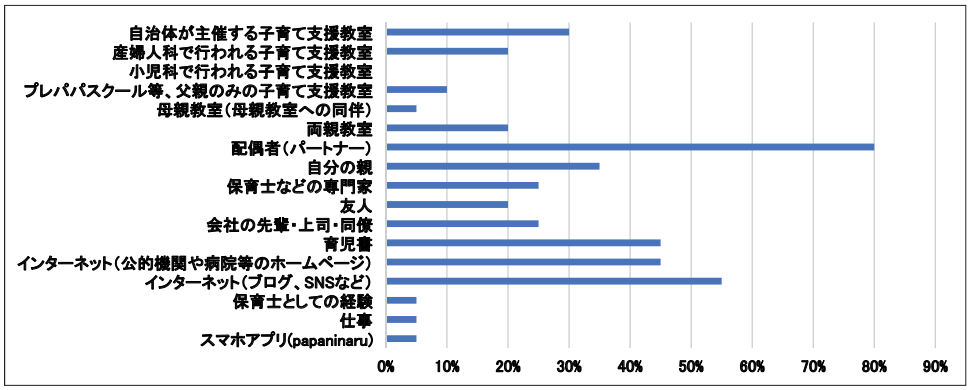

図５　父親の育児情報の取得方法

結果である。複数回答可とし、育児情報を取得するために利用していたもの全てに回答をするよう求めた。

子育てに関する知識を得た方法としては、圧倒的多数が「配偶者」で 80％という結果であった。次に多い回答は「インターネット（ブログや SNS）」で 55％であった。インターネットから得られる情報の中でも情報の正確性の点から公的機関や専門家から発信されているものと、個人が発信しているブログ・SNS の２つにわけて回答を求めた。その結果、「ブログ・SNS」と回答する父親は55％であったのに対し、「公的機関や病院等」からと回答があったのは 45％で、「ブログ・SNS」の回答が 10 ポイント高い結果となった。

複数回答で情報収集として利用していたもの全てに回答を求めたため、インターネットから得た情報のうち①「公的機関・病院等」への回答、②「ブログ・SNS」への回答、③両方の回答がそれぞれどの程度の割合なのか分析した。

①～③全体の数は 15 件、そのうち①の「公的機関・病院等」の回答数は４件で全体の 26.7％、②の「ブログ・SNS」の回答数は６件で全体の 40.0％、③両方の回答数は５件で全体の 33.3％という結果になった。②の「ブログ・SNS」のみと回答する父親が①の「公的機関・病院等」のみの割合よりも 13.3 ポイント高く、公的な情報よりも他の父親のパーソナルな経験に関する情報を得ようとしている可能性がうかがえる。

育児知識を提供する教室を「子育て支援教室」と定義し、「自治体が主催する子育て支援教室」、「産婦人科で行われる子育て支援教室」、「小児科で行われる子育て支援教室」、「父親のみの子育て支援教室」、「両親教室」の５つの選択肢を設定した。

その結果、「子育て支援教室」に参加して、育児知識を得ていたと回答した父親は、いずれの項目においても 30％以下にとどまっている。

子育て支援教室へ参加しなかった回答者にのみ、参加しなかった理由について尋ねた。

回答が最も多かったのは、「勤務日の関係で参加が難しかった」という理由で 46.7％と半数近くにのぼった。次に多かったのは、「講座内容にあまり興味がわかなかった」で 26.7％であった。その他の理由として、「案内等がなく、教室の存在を知らなかった」や「新型コロナウイルス感染症の影響で教室が開催されなかった」などが挙げられた。

不参加理由として「仕事」に関する理由が最も多く挙げられたことから、父親が育児をしやすい社会に変化してきているとは言うものの、依然として仕事と育児の両立が難しい環境にあることが確認できた。

④　参加したい子育て支援教室

「どのような子育て支援教室に積極的に参加したいと思うか」について自由記述で回答求めた。有効回答の 17 件をカテゴライズしたとこ

表２　積極的に参加したい子育て支援教室

カテゴリー	数	具体的な内容			
育児技術	6	ケーススタディが多くあるもの（夜寝ないときにどうするかなど）	寝かしつけ方 抱っこして赤ちゃんが寝た後で、背中スイッチを入れずにベッドに寝かす方法など、具体的に技術面での講座	新生児（未だ反応がない頃）のときの声がけの仕方	躾の仕方
父親・子ども同士の交流	3	子供どうし、父親どうしの輪が広がるもの	父親同士の意見交流	父親の交流	―
妊婦・子どもの思いへの理解	3	父親のやるべき事、考え方など、妻や子どもをサポートできる内容	つわり体験	子どもの気持ちにより添えるもの	―
子どもの発達に関する知識	2	子どもの運動発達についての知識の提供	小さい頃に一通りかかる可能性のある病気に関する知識と対応	―	―
仕事と育児の両立	2	共働きの育児と仕事の両立方法	赤ちゃんが生まれた後、忙しい父親でもできる育児参画	―	―
その他	1	幅広く科学的かつジェンダーレスな知識が得られるもの	―	―	―

ろ、「育児技術」、「父親・子ども同士の交流」、「妊婦・子どもの思いへの理解」、「子どもの発達に関する知識」、「仕事と育児の両立」「その他」に分類した（表2）。

中でも「育児技術」についての回答が最も多く、続いて「父親・子ども同士の交流」、「妊婦・子どもの思いへの理解」についての回答が３件、「子どもの発達に関する知識」「仕事と育児の両立」についての回答が２件という結果であった。

「育児技術」の具体的な内容は、特に「寝かしつけ」に関する回答が目立った。しかしながら、既述した現在の父親教室や両親教室の実例には、寝かしつけに関する実践講座や子どもへの声掛けの仕方といった講座は認められない。

次に、遊びを中心としたイベントを「子育て支援イベント」と定義し、「どのような子育て支援イベントに積極的に参加したいと思うか」について自由記述で回答を求めた。有効回答数16件をカテゴライズしたところ、「子どもの成長に繋がる活動」「制作」「運動」「親子のふれあい」「他児との交流」「その他」の６つに分類できた。（表3）。

この６カテゴリーの中で「子どもの成長に繋がる活動」に関する回答が４件あった。また、「制作」や「運動」に関する項目では、「子どもと」という言葉が認められ、子どもと一緒に活動できる内容が求められていることがわかる。

(4) 父親の子育て支援活動主催者へのインタビュー

近畿圏で父親向けの子育て支援を行っているＡ男性保育士（以下、「Ａ保育士」とする。）にインタビュー調査の協力を依頼した。

インタビューは、Ａ保育士と筆者らによる対話型インタビュー形式とした。概要は以下の通りである。

実施時期：2021年10月２日　約１時間

実施方法：ZOOMを用いたオンラインで実施

インタビュー内容の要約を以下に記す 。

①　父親の子育て支援活動開催のきっかけ

Ａ保育士は社会が男性中心に回っていることに注目したとのことである。社会で活躍する男性が子育てを意識する、子育ての経験を深めることが、子育てをする父親への働きかけを変

表３　参加したい子育て支援イベント

カテゴリー	数	具体的な内容		
子どもの成長につながる活動	4	休日開催で、かつ、子どもの成長にとっても必要性が理解できるイベント	子どもの成長によいもの身体能力が育つイベント	子どもの好奇心が育つような取り組みを教えてくれる講座
制　作	3	工作	何かを制作するイベント	子どもとの協働作業などを含む工作、遊び
運　動	2	子どもと一緒に身体を使って遊べるもの	子どもと身体を動かすイベント	―
親子のふれ合い	2	子どもとのふれ合い遊びのイベント	ふれ合い遊び	―
他児との交流	2	他の子どもとのふれ合えるイベント	交流できるもの	―
その他	3	野外活動	音楽にふれられるイベント	子どもが楽しければ何でも

えることに繋がるのではないかと考え、父親に向けた子育て支援を開催し続けている。

約 10 年活動を行う中で、父親の参加理由に変化が見られたとのことであった。活動当初は「配偶者から勧められて参加した」という父親が多かったが、「配偶者に勧められて活動を知り、楽しそうだったから参加した」という父親が近年増えてきていると言う。

活動への参加理由の変化から、子育て支援活動に参加する父親は、積極的、かつ楽しんで子育てに取り組んでいることがうかがえる。

② 父親同士の交流について

参加理由に変化があった一方で、父親の交流の時間で話される内容に変化はない。その内容は「入浴時、子どもが嫌がったときの対応の仕方」や「寝かしつけ」、「食事の世話」といった育児の話と家事の分担についてが主となっているという。配偶者との価値観の違いについて消化しきれない気持ちを吐露する父親もいるとのことであった。

また父親同士が交流している間も、子どもは父親が見るという形で実施しており、参加者同士が子どもの姿を見守り、寄り添いながら活動する場としている。父親の場合、自分の子が他児と関わる姿や他の親子の姿を見る機会は少ないことから、設定した環境であるとのことであった。

③ プログラムの構成について

A 保育士は活動のプログラムを考える上で、父親がリラックスして過ごせる環境を大切にしているとのことであった。安心して過ごせる環境にするために大切なのは、継続性である。3～5 回の継続したプログラムを設定することで、次回も同じメンバーと集える安心感や帰属意識が芽生える。また、各回自己紹介を行っており、回数を重ねる毎に自分のことをより深く開示していくようにしている。同じ活動でも段階を設けて継続していくことで父親同士の関係性がより深いものとなるとともに、仲間意識や安心感が得られるようになるとのことであった。

このようなプログラムを通して父親同士の関係性が構築されることで、他人には話しづらいことを話すことができ、ストレスを解消する場にもなっているようである。他の参加者の話を聞くことで「自分だけではない」と共感し、安心できる父親の居場所となっているとのことであった。

(5) 父親の子育て支援実践の関与観察

A 保育士が主催する父親の子育て支援について関与観察を行った。

見学日時：2021 年 10 月 9 日土曜日
10 時 30 分～ 11 時 45 分
実施場所：X 市内認定特定非営利活動法人

参加者と活動内容

参加者：A 男（0 歳 8 か月）、A 男の父親
B 子（0 歳 11 か月）、B 子の父親
子育てアドバイザーの女性スタッフ２名
主催の A 保育士は Zoom での参加

活動の流れ：

10 時 30 分～　自己紹介
10 時 40 分～　親子ふれあい遊び
10 時 50 分～　パパトーク

会場室内の環境構成

活動はジョイントマットが敷かれたスペースで行われた。室内には絵本やままごと道具、乳児向けの木製ベビージムなどが置かれている。畳みのコーナーは、主におむつ交換コーナーとなっている。床全面にジョイントマットが敷かれ、窓が多く、明るい雰囲気の部屋となっている。ベビーベッドも一台設置されており、ベッド奥の棚には、アレルギー対応のパンフレットや食物アレルギーのレシピ本などが置かれている。

活動の様子

当日の活動は、7 月に初回が実施され、その後連続して開催される予定であったものである。しかし、新型コロナウイルスの影響により X 市に緊急事態宣言や蔓延防止策等が発令されて、延期となり、10 月に実施された。このような経緯があり、父親同士や父親とスタッフとの関係は既に築かれている状態であった。

自己紹介では父親の名前、子どもの名前、年齢（月齢）、最近の子どもの姿が話された。親子ふれあい遊びでは、これまでの活動で実践された「しょうゆやさん」と「おおなみこなみ」を親子 1 組ずつ行った。ふれあい遊びをするにあたって、スタッフから家庭でのふれあい遊びについての話題が出された。参加者の B 子父は前回の活動で知ったふれあい遊びが毎朝の日課となっていると話していた。ふれあい遊びが出勤前に子どもとふれあう時間となっていることや体を大きく動かすことから出勤前の準備運動のようになっていると笑顔で話す姿が認められた。

「しょうゆやさん」と「おおなみこなみ」のふれあい遊びを一緒に楽しんだ後、スタッフから新しいふれあい遊びが紹介された。今回の活動では「にんどころ」というわらべ歌を用いたふれあい遊びと、「パンダ・うさぎ・コアラ」の手遊びをもとにしたふれあい遊びが実施された。スタッフの人形を用いた見本の後で、親子での実践に移った父親には、人形を用いることで子どもとの動きをイメージしながら遊び方を理解することができるようであった。その後の実践では、子どもの表情を見たり、子どもの反応に応答したりしながら親子共に楽しんで取り組む姿が認めれた。

ふれ合い遊びの後は、「パパトーク」という時間が設けられていた。「パパトーク」とは、前回 7 月の活動から今回までの出来事や変化について、参加者とスタッフとが自由に話し、交流する時間である。この時間がメインの活動となっており、40 分ほどの時間が取られていた。

見学時の「パパトーク」では、「保育園選び」や「家事育児」についての話題を主として、自身の家庭のことや悩みについて自由に話し合いが展開された。

参加者の B 子父が気になっていることとして、保育園選びについての話題が挙げられた。B 子父は一人で保育園見学に行ったり、インターネット等で積極的に情報収集をしたりしていると話していた。特に保育園見学の際は、母親ばかりでB子父は周りからの視線が気になったということも話題に挙がった。

また、A男父、B子父共に、自分の希望条件だけでなく、配偶者が保育園に望む環境もしっかりと取り入れて選びたいと話しており、配偶者と子育てについての話し合いを積極的に行っている様子がうかがえた。

次に、スタッフから家事育児の分担についての話題が挙げられた。A男父、B子父共に配偶者と家事育児の担当を明確に決めているわけではないが、自然と互いにすることが決まっていると話した。また育児に関して、B子父は離乳食づくりをしてみたいが、配偶者が自分の仕事

として捉えており、なかなか任せてくれないとの思いを吐露した。その話を聞いてA男父は、B子父の姿勢を褒めながら、A男父自身は離乳食づくりを配偶者に任せてしまっていることを話した。子育てアドバイザーのスタッフも、父親が離乳食を作りたいというのは珍しいが母親の視点から考えると、そのように協力的な姿は嬉しいし助かると話していた。

また、A男父は配偶者と掃除の頻度や意識に差があり、上手くいかないことがあると話した。B子父も強い共感を感じている様子で、B子父自身も同じような経験があると話した。

「パパトーク」の様子からは、A男父、B子父がお互いの表情を見て相槌をうったり共感したりしながら話を聞いており、気軽に家庭のことや子どものこと、子育てのことを相談し合える関係となっていることが理解できた。

父子の様子

観察の当日は、生後8か月のA男と生後11か月のB子が参加していた。A男は終始機嫌がよく、さまざまな玩具や家具に興味津々といった様子で室内をはいはいで移動したり、ゆっくりと歩き回ったりしていた。また、B子と関わろうとする姿も認められた。B子が持っている絵本を引っ張ろうとしたり、顔に手が触れたりなど、トラブルに至る前に父親がいち早く気づき、抱っこをして距離を取らせる場面があった。A男父は基本的にA男の行動を抑えることなく、A男の姿を見守っていた。また、上述したような危険（と思われるよう）な行動があったときには、A男をしばらく抱っこして体をさすり、気持ちを落ち着かせるようにしていた。

B子は少し不安げな表情で周りを窺いながら過ごしていた。B子父はそのようなB子の姿を見て、安心できるよう頭や体を撫でたり、目線を合わせて声をかけたりしていた。B子は終始父親の近くで過ごしていたが、ふれあい遊びや父親との会話では笑顔が見られ、徐々に緊張がほぐれてきた様子であった。またB子父曰く、自宅では少しずつ言葉が出るようになったとのことで、活動の後半にはB子が言葉を発する場面もあった。その際、その場にいた全員が「お話できたね」や「B子ちゃんの声聞こえたよ」など語りかける言葉がけがなされた。

また、A男が歩み寄ってきた際には、B子父は話を一時中断し、A男に目線を合わせて声をかけたり、頭を撫でたりと他児と交流する姿が認められた。

以上のように、父親と子どもの間には、繊細で豊かな親子相互交流が展開されている様子が観察された。

4. 考察

（1）父親の育児と母親の関わり

アンケートの調査結果から乳幼児期に父親が行う育児としては「子どもと遊ぶ」、「子育てについての話し合い」をよく行い、「保育園・幼稚園への送迎」や「病児の世話」に関わることが少ないことが確認できる。また、「寝かしつけ」や「食事の世話」といった育児に関する技術が必要とされる育児活動については、消極的であることが確認できる。

自由記述の回答の中にも「寝かしつけ方を教えてもらえる講座」や「起こさないようにベッドに寝かせる方法」といった内容が認められ、子どもを寝かせることに困難感を抱えていることがうかがえる。

また、回答者の基本情報として、子どもの昼間の主な養育者について尋ねたところ、50%が「配偶者（パートナー）」と回答していた。昼間常に子どもと関わっている配偶者のほうが寝かしつけや食事の世話等には慣れているために配偶者の役割として習慣づいていることが考えられる。

父親の子育て支援の関与観察の際、育児技術についての話題が挙げられている。参加者の父親は離乳食を作ってみたいと思いつつも、配偶者が自分の仕事として捉えているため、なかなか作る機会がないとのことである。そのことについて、もう一人の参加者やスタッフの話しから「父親が離乳食づくりをしたいというのは珍しい」と考えている。子どもに食事を作り与えることは母親の役割という印象が広く根付いていることがうかがえる。調査結果からも、配偶

者のほうが父親よりも子どもと関わる時間が長いことがわかっており、配偶者のほうが育児の役割を特に意識することなく決めてしまう可能性がある。フルタイム勤務の父親が多く、自宅で子どもと関わる時間が少ないために、父親ができることは限られる。しかしながら、育児の役割を明確に決めてしまうのではなく、時には父親に任せることが父親の育児の幅を広げるためには必要だと考えられる。

(2) 父親の育児情報資源

父親は育児情報を主に配偶者から得ている（図５）。父親同士の交流と考えられる「友人」や「会社の先輩、後輩、同僚」という回答は25％以下となっており、父親同士で育児に関する情報交換をする機会は少ないことが理解できる。

上述したように、昼間の子どもの主な養育者は50％が「配偶者」と回答している父親にとって子どものことをよく知っている最も身近な存在が配偶者で、知識の獲得も配偶者からである。配偶者は子育てをしながら父親への育児教育も行っており、大きな役割を担っていることが理解できる。

「配偶者」の次に育児情報資源として多かったのが「インターネット（ブログやSNS）」となっている。近年、ブログやＳＮＳなどで個人が簡単に情報を受信・発信することができるようになっている。隙間時間に手軽に見ることができる点が、忙しい父親にとって利用しやすいツールがあると考えられる。

しかし情報が膨大である分、取捨選択が重要である。ブログやSNSに書かれていることが必ずしも適切であるとは言えない。おそらく回答協力を得られた父親たちも情報収集の１つとして利用していると思われるが、ブログ・SNSから得られる情報を過信しすぎないように注意が必要である。

一方、公的機関や行政機関が発信している情報は、一定の手続きを経て掲載されているものであったり、専門家が情報を提供していたりするという点から信頼性が高い。自身の子育てに必要な情報を適切な方法で得られるよう、情報取得の方法を検討する必要がある。

これについて別の観点からいえば、公的な情報よりも他の父親の子育てに関するパーソナルな経験や感情を知りたいと考えている可能性も考えられる。

(3) 子育て支援教室の実態と活動の提案

父親の子育て支援教室への参加は、両親教室室への参加（20%）、母親教室への同行（5%）と低調である（図５）。

子育て支援教室への不参加理由として最も多かったのが、「勤務日の関係で参加が難しかった」という理由である。「その他の回答」として理由が挙げられたのも仕事関係の理由が目立っている。仕事以外の理由で多数となったのは「講座内容にあまり興味がわかなかった」という理由である。講座内容について興味がわかない理由として、インターネットの普及が考えられる。子育て教室に参加せずとも、育児に関する情報がインターネットを用いて気軽に調べることができるためである。

この他の理由として、父親が求める技術面の実践講座と実際に開催されている実践講座の内容とにギャップがあることが考えられる。仙台市、横浜市、名古屋市、堺市、北九州市の両親教室、父親教室の実例から、実践講座として実施されている「沐浴」や「抱っこ」、「おむつの替え方」は、子どもの誕生直後から活用できるという点で即戦力となり得る。しかし父親が求めている技術面の講座としては「寝かしつけ」や「子どもへの声掛け」といった内容が挙げられている。父親が子どもの誕生直後の新生児期だけでなく、継続的に子育てに参加する過程で、様々な困難に遭遇していることがうかがえる。

また、自治体によっては「離乳食教室」や「子どものしつけ」についてなど育児に関する様々な講座を行っているが、基本的に平日開催となっているため父親の参加は難しい。平日のみや土日のみといったように講座の実施日時を固定せず柔軟に設定したり、オンラインでの開催にするなど実施方法を変えたりして必要な情

報を必要とする人が受け取れるような環境が整えば、父親も母親もより育児に取り組みやすくなるのではないだろうか。自治体においても、父親の継続的な育児について再考する必要がある。

父親の子育て支援教室不参加の理由の多くは、仕事の関係と講座内容についてのことであった。その他、「新型コロナウイルス感染症の影響で教室が開催されなかった」という理由も挙げられている。上述した５市のホームページから令和３年度の子育て支援教室の開催状況を見ると、対面で開催しているところが多かったが、中止となっていたり、実技講座のみ中止となっていたり様々な対策を講じている。新型コロナウイルス感染症の影響に限らず、様々な事情で育児方法を学ぶことが難しい父親・母親のために、今後新しい形式で育児情報を提供することが必要だと考えられる。

(4) 父親同士の交流と父子の活動

アンケート調査結果から、父親が子育て支援教室に求めるものは、「育児技術」が最も多く、中でも「寝かしつけ」や「子どもへの声掛け」といった子育ての中で長期にわたって必要となる育児技術の講座である。また、「父親・子ども同士の交流」、「妊婦･子どもの思いへの理解」に関する内容も認められる。

父親に向けた子育て支援活動を観察した際の父親同士の姿を振り返ると、子どもの成長のことだけでなく、保育園選びとや家庭の家事のことなど、話題が多岐にわたっている。また同じ父親という立場で育児を行っていることから、共感する点が多くあるようである。はじめのうちは雰囲気が固く、スタッフに促される形で会話が始まったが、徐々に会話が広がり、共感し合う場面が多くなるにつれ父親たちの笑顔が頻回に認められるようになっている。配偶者（パートナー）とは違う点で、自分の気持ちや悩みに共感してくれる存在が父親の家庭でのストレスを解消することに繋がっていると考えられる。

しかし実際に行われている講座の中で「父親の交流会」という講座内容は、1. で挙げた５市のうち、神奈川県横浜市青葉区の父親教室で実施されている「先輩パパママの話を聞く」という講座以外には確認できない。一方で母親教室では、母親同士の交流の場が設けられており、その点で父親と母親の子育て支援には違いが認められる。

母親の居場所づくりについては、長く検討されたり実施されたりしているが、母親と同様に父親同士のコミュニティを広げる場、居場所づくりの１つとして、両親教室や父親教室で、「父親の交流会」を行うことには意義があると考えられる。

遊びを中心とした「子育て支援イベント」に希望する内容としては、「子どもの成長に繋がる活動」に関する内容が多く、次いで「制作」「運動」「親子のふれあい」「他児との交流」についてがあげられている。「制作」や「運動」、「親子のふれあい」に関する内容では、「子どもと一緒に」がキーワードである。アンケートの結果からもわかるように、現在も父親は仕事の関係で子どもと関わる時間が少ない傾向にありイベントでは子どもと一緒にできる活動を求めていると考えられる。常に子どもと共に生活する中で閉塞感を感じ、時には「一人になりたい」「大人の言葉を話したい」と訴えることも多い母親への支援とは異なる観点が必要であることが理解できる。

父親に向けた子育て支援活動を実施しているＡ保育士のインタビューにもあったように、父親が子どもを見守りながら他の参加者（父親）と交流する機会は少ない。他児との関わりや他の親子の関わりから、自分の育児を見直す機会にもなる。父親だからこそできる身体を大きく使った遊びや工作など、父子が一緒に楽しめる活動を提案するとともに、父親が落ち着いた環境で子どもや他の父親、母親と交流する場を提供することが必要である。

5. 結論

父親の育児参加に対する関心が高まっている中、子育て支援の多くは母親を対象としているのが実態である。数少ない父親を対象としてい

る子育て支援について、実践者に対するインタビュー及び実践の関与観察を行うことで、「子育て支援教室」と「子育て支援イベント」の2つの観点から父親への子育て支援について考えてきた。まず、「子育て支援教室」には新生児期というピンポイントではなく、継続的な子育て期間における寝かしつけや言葉がけなど技術面の実践講座の充実が求められている。次に、「子育て支援イベント」が父親の交流の場、父親の居場所となり、父親の育児や家事、家庭でのストレスの解消となっている。また、子どもと関わる時間が少ない父親であるからこそ、父子で過ごす時間を提供することが求められている。父親の育児参加を求めるためには、子どもを真ん中に据え、母親の育児支援のみならず父親の育児支援、言わば心理的居場所づくりも必要である。併せて、多様な家族の在り方を理解し寄り添う姿勢が求められる。

文献

足立安正（2020） 市区町村における出生前教育の実態～父親の育児参加を促す取り組み～．摂南大学看護学研究．Vol.8. No.1

ベネッセ総合教育研究所（2018）「幼児期の家庭教育国際調査」第二弾報告 https://berd.benesse.jp/up_images/research/20180801release.pdf.2021年11月29日閲覧

加藤承彦・越智真奈美・可知悠子・須藤茉衣子・大塚美耶子・竹原健二（2022）父親の育児参加が母親，子ども，父親自身に与える影響に関する文献レビュー．日本公衆衛生雑誌第69巻第5号．p.321-337

北九州市ホームページ 妊娠・出産・育児に関する教室 - 子育てhttps://www.city.kitakyushu.lg.jp/ko-katei/file_0051.html.2021年12月16日閲覧

厚生労働省（2021）「令和2年度雇用均等基本調査」の結果概要．p.18

厚生労働省（2021）育児・介護休業法について令和3年度改正法の概要 https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000788616.pdf.2021年11月29日閲覧

厚生労働省（2021） リーフレット「育児・介護休業法改正ポイントのご案内」．p 1-2 https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000789715.pdf.2021年11月29日閲覧

松井香澄（2022）父親の子育て支援ニーズに関する調査－アンケート及び子育て支援実践の関与観察－．京都女子大学発達教育学部児童学科卒業論文

名古屋市ホームページ 共働きカップルのためのパパママ教室のご案内（暮らしの情報） https://www.city.nagoya.jp/kodomoseishonen/page/0000009756.html.2021年12月16日閲覧

名古屋市瑞穂区ホームページ 令和3年度パパ＆ママ教室のご案内（予約制）：瑞穂保健センター https://www.city.nagoya.jp/mizuho/page/0000139014.html ．2021年12月16日閲覧

内閣府男女共同参画局（2020）男女共同参画白書 令和2年版 本編Ⅰコラム1 生活時間の国際比較.https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r02/zentai/pdf/r02_tokusyu.pdf. 2021年11月29日閲覧

堺市ホームページ パパの育児教室 https://www.city.sakai.lg.jp/kosodate/hughug/ninshin_shusan/ninshin/papaikuji.html

同上 令和3年度妊婦教室 http://www.city.sakai.lg.jp/smph/minami/annai/gyomunaiyo/hokencenter/boshi/ninsanpu/reiwa2ninpukyoushitu.html･2021年12月16日閲覧

仙台市ホームページ 妊娠・出産、子育てのための情報や教室など． https://www.city.sendai.jp/kodomo-chiiki/kurashi/kenkotofukushi/kosodate/joho/joho/hahaoya.html .2021年12月16日閲覧

柳原眞知子（2007） 父親の育児参加の実態．天使大学紀要．Vol.7. pp.49-51

横浜市青葉区ホームページ パパの子育て教室 https://www.city.yokohama.lg.jp/aoba/kurashi/kosodate_kyoiku/kosodateshien/20140224205246.html

同上 子育て情報一覧 https://www.city.yokohama.lg.jp/aoba/kurashi/kosodate_kyoiku/kosodateshien/child-woman.html#1.2021年12月16日閲覧

謝辞

お忙しい中アンケートの回答にご協力いただいたお父様方、アンケート及びインタビュー、子育て支援活動の関与観察に快くご協力いただきました鵜川真悟先生、施設関係者の方々に心より感謝申し上げます。

付記

本稿は松井（2022）をもとに、第二筆者の瀬々倉が新たに加筆修正し再構成したものである。